

第74回 憲法を考える映画の会

サイレント・フォールアウト 乳歯が語る大陸汚染

手元資料

- 日時：2024年2月3日（土）13：30～
- 会場：文京区民センター 3A会議室

●プログラム

- 13：30～13：40 映画について
- 13：40～15：05 映画『サイレント・フォールアウト 乳歯が語る大陸汚染』（81分）
- 15：15～16：20 トークシェア
 - ・映画を見て考えたこと
 - ・私たちのアクションは
- 16：20～16：30 これからの憲法を考える映画の会

■手元資料 目次

- 資料① 『サイレント・フォールアウト』について P.2
- 資料② 『放射線を浴びたX年後』
『放射線を浴びたX年後 2』 P.3
- 資料③ 『サイレント・フォールアウト』を見て考える
「査」 P.4
- 資料④ 原爆・核実験・放射能汚染・内部被曝について
考える映画・映像 P.5
- 資料⑤ 核実験・核爆発年表 P.5
- 資料⑥ 第73回『流血の記録 砂川』2023/12/23
坂田和子さんのお話 P.8
- 資料⑦ 第73回『流血の記録 砂川』2023/12/23
参加者感想から P.10
- 資料⑧ 砂川事件裁判国家賠償訴訟判決 P.11
- 資料⑨ これからの憲法を考える映画の会 P.12

第74回 憲法を考える映画の会
放射線を浴びたX年後 III

Silent Fallout

サイレント・フォールアウト 乳歯が語る大陸汚染

2024年2月3日（土）
13時30分～16時30分
文京区民センター 3A会議室
(地下鉄 春日駅 2分・後楽園駅 5分)

プログラム
13：30～13：40 この映画の背景について
13：45～15：10 映画『Silent Fallout』上映
15：20～16：30 トークシェア

●加費：一般 1000円 学生・若者 無料
(当日、会場でお支払いください。予約不要でもたても参加できます)

今回の映画を見て考えていきたいこと

「放射線を浴びたX年後」（2012年）、「放射線を浴びたX年後II」（2015年）と一貫して東大東洋館に放射能汚染被害を訴え続けている伊藤さんの実作です。伊藤さんは、アメリカ人にごさ、放射能汚染被害の真実について知ってもらわなくてはと誓う思いから、この新作『サイレント・フォールアウト』のアメリカ本土での上映活動を盛り上げようとしています。私たちも、その活動に賛同し、この映画の上映を拡げていくことを通じて、国際的な場で放射能に向けての運動に役立っていきたいと思います。

この映画の力は、いろいろありますが、何よりも、子ども達を保護から守るために女性たちが始めた『乳歯調査』という市民運動を紹介しているところにあると思います。

調査の伊藤さん「女性の行動がアメリカを変えた。放射能汚染から守るために女性たちが始めた『乳歯調査』という市民運動を紹介しているところにあると思います。

調査の伊藤さん「女性の行動がアメリカを変えた。放射能汚染から守るために女性たちが始めた『乳歯調査』という市民運動を紹介しているところにあると思います。

この映画をより多くの人に知ってもらって、放射能に向けてみんなが考えよう。そうしたい。『乳歯調査』をつくりたい。ぜひぜひと願っています。

■映画『サイレント・フォールアウト』予告編
<https://youtu.be/Tq05Q3kEay>

憲法を考える映画の会
〒185-0024 東京都国分寺市泉町3-5-6-303
問合せ：email：hanasaki33@me.com
TEL：042-406-0502
<http://kenpou-eiga.com/?p=2928>

憲法を考える映画の会

〒185-0024
東京都国分寺市泉町3-5-6-303
TEL & FAX：042-406-0502
ホームページ：http://kenpou-eiga.com/
E-mail：hanasaki33@me.com



資料① 映画『サイレント・フォールアウト』について

【2分40秒の監督びでおメッセージ】

皆さんこんにちは。伊東です。今日は映画をご覧くださいありがとうございます。

【環境問題】

地球規模で環境を破壊している最も大きな問題というのは放射能の問題だという風に考えています。放射能の問題と環境の問題って意外と別々で考えられるんですけどもそれが一緒になって、環境問題として考えられていくという世界が、まさに今必要なんではないだろうかというふうに考えています。そのことを目的にこの映画を作りました。

【スタートライン】

この放射能の問題について一般の人たちに関心を持ってもらいたい、この放射能の問題を解決していくためのスタートラインについてもらいたいという風に考えてものすごくシンプルに作ったつもりです。

【アメリカを変えることで世界が変わる】

基本的にアメリカの人たちに向けて作りました なぜかということですね。アメリカの人たちが専門家の人も含めてこのアメリカ大陸全体が放射能で被曝し、アメリカの人々が被曝するということが気がついてない、知らないという事実を知ったからです。アメリカの人たちにまず映画を見て、あなたたちみんな被曝者ですってことを伝えたいというふうに思いました。

【唯一の被爆国】

日本はアメリカによって2個の原爆を投下された国です。アメリカという国は実験という名目なんですけども101個の原爆を投下された国とも言えます。アメリカの人たちにこういう風に言いたいと思うんです。あなたたちは知らないうちに被曝をさせられました。核兵器というものを持つために健康や命を脅かされているというこの事実をどう考えるのかと。

【誰のための核兵器？】

そうやって作られた核兵器というのは一体誰のためのものなのかと、そのことについてアメリカの議会の中でしっかりと議論してもらいたいというふうに考えています。そのことが世界に伝播して、世界の放射能の問題に対する意識というのが変わっていく日本の放射能というものに対する考え方も変わっていくと。

【サブテーマ】

もう一つですね この映画のサブテーマってのがあってですね女性の行動が社会を変える世界を変えるというのがサブテーマになっています。

言いたいことはたくさんあるんですけども、まずは映画をご覧くださいいろいろ考えていただいて、その上でもし可能であれば何かアクションを起こしてほしいと思います。自分ができる範囲の中で何か行動を起こすということを考えてもらいたいと思います。それではどうぞご覧ください。



作品解説

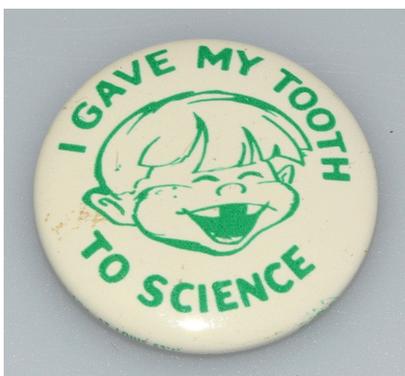
放射線を浴びたX年後III「サイレント・フォールアウト」乳歯が語る大陸汚染

1951年からアメリカ国内（ネバダ核実験場）で始まった核実験は、928回に及んだ。そのうち、100回が大気圏内核実験だった。大気中で行われた核実験によって生れた膨大な量の放射性物質は、風でアメリカ各地に運ばれ、雨や雪とともに落ち、地上を汚染し続けた。アメリカ原子力委員会は、調査の結果、ストロンチウム90が全米の牛乳を強く汚染していることを把握していたが、国民に知られることはなかった。ところが、1950年代なかばから、大陸が放射能汚染していることを国民は徐々に知ることとなり、特に、放射能汚染の影響が強いとされるセントルイスで女性を中心とした大きな動きが生まれる。それが「乳歯調査」と呼ばれる活動だった。子どもたちは、被曝しているのか？カルシウムに似た性質をもつストロンチウム90は、骨や歯に留まる。そのため、抜けた乳歯を検査すれば、子どもが被曝しているかどうかを証明できる。最終的に集まった乳歯は、32万本。分析の結果、子どもたちの被曝が裏付けられた。はたして、乳歯調査の結果は？世界の未来を変えたのか？

プロデューサー・監督・撮影：伊東英朗（いとうひであき）

**皆様のご支援を
どうぞよろしくお願いいたします**

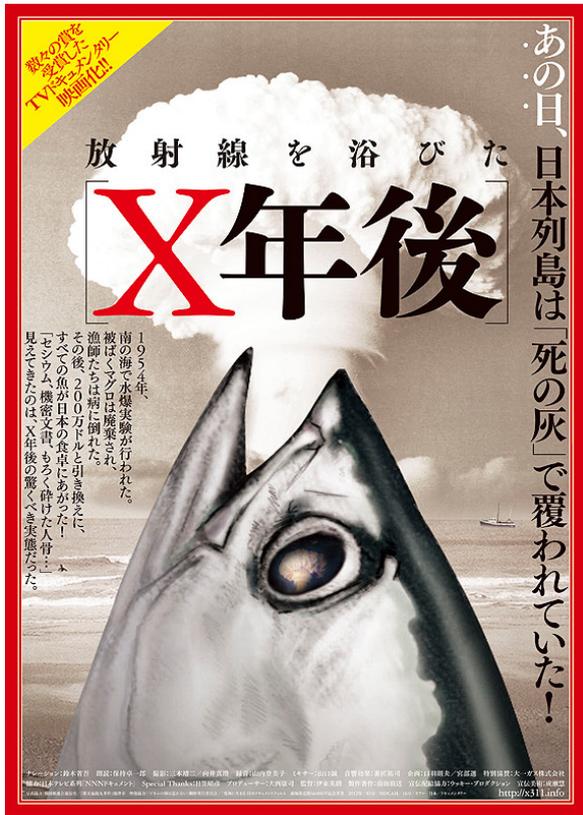
憲法を考える映画の会では、今回の上映作品『サイレント・フォールアウト 乳歯が語る大陸汚染』の上映支援、とくにアメリカでの上映活動の支援にカンパを呼びかけます。この資料には含まれた「封筒」に、皆様のお気持ちで結構ですので、カンパをお願いします。



映画『サイレント・フォールアウト』の問合せ先

お問い合わせ090-3842-2956（事務局・酒井）もしくは、xyears.info@gmail.comまで

参加人数50人までの場合、30,000円（消費税別）。参加人数50人を超える場合、（50人まで分）30,000円（消費税別）+（50人を越えた分）500円×人数分となります。ただし上限を100,000円（消費税別）とします。（190人を越えた場合、すべて100,000円（消費税別）となります）



放射線を浴びたX年後

あの日、日本列島は「死の灰」で覆われていた！

1954年アメリカが行ったビキニ水爆実験。当時、多くの日本の漁船が同じ海で操業していた。にもかかわらず、第五福龍丸以外の「被ばく」は、人々の記憶、そして歴史からもなぜか消し去られていった。間に葬られようとしていたその重大事件に光をあてたのは、高知県の港町で地道な調査を続けた教師や高校生たちだった。その足跡を丹念にたどったあるローカル局のTVマンの8年にわたる長期取材のなかで、次々に明らかになっていく船員たちの衝撃的なその後…。そして、ついにたどり着いた、「機密文書」…そこには、日本にも及んだ深刻な汚染の記録があった—

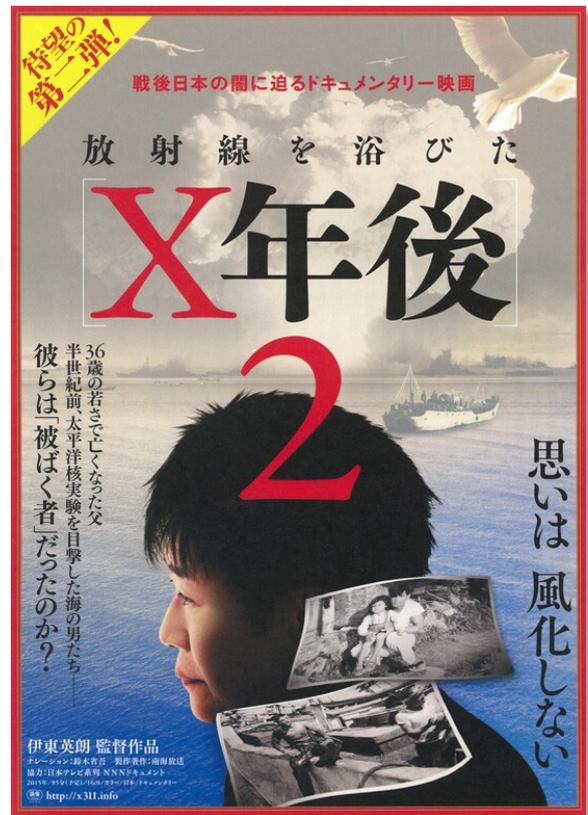
南海放送（愛媛県松山市）では約8年にわたり、これまであまり知られることのなかった「もうひとつのビキニ事件」の実態を描いてきた。地元の被災漁民に聞き取りをする高知県の調査団との出会いがきっかけだった。制作した番組は「地方の時代映像祭 グランプリ」「民間放送連盟賞 優秀賞」「早稲田ジャーナリズム大賞 大賞」など、多数受賞。2012年1月に「NNNドキュメント」（日本テレビ系列）で全国放送され反響を呼んだ『放射線を浴びたX年後』に新たな映像を加えた映画化。

《推薦》

文部科学省選定（青年向き・成人向き）／日本映画ペンクラブ推薦／カトリック中央協議会・広報推薦

《受賞歴》

第50回ギャラクシー賞 報道活動部門＜大賞＞／平成25年度日本民間放送連盟賞 特別表彰部門＜「放送と公共性」最優秀＞／第40回放送文化基金賞＜放送文化部門＞／2015年度日本記者クラブ賞＜特別賞受賞＞／2012年 第86回キネマ旬報ベストテン＜文化映画部門＞／2012年度 日本映画ペンクラブ・ベスト5＜文化映画部門＞／第30回 日本映画復興賞＜復興奨励賞＞／第4回 座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル コンペティション部門入賞／第11回 世界自然・野生生物映像祭＜審査員特別賞＞ほか



放射線を浴びたX年後2

これは、遠い時代・遠い場所の話ではなく、私たちの[X年後]の物語である。

「父は なぜ死んだのか？」
半世紀前の太平洋核実験 漁師たちが伝える無言のメッセージとは—？

終戦直後の1946年。太平洋上で、米国による核実験が始まった。しかし多くの漁船が、その後100回を超える実験期間中も、近海でいつも通り操業を続けていた。間に葬られたビキニ水爆実験の真相に迫る前作『放射線を浴びたX年後』から3年。高知県室戸市ほか各地での継続取材は、新たな展開を迎えていた。安全や核をめぐる国のあり方があらためて問われる今、かつて日本の繁栄を支えた海の男たちのメッセージに、地方TV局のディレクターが迫った渾身のシリーズ第二弾！

東京で広告代理店を経営する川口美砂さん、59歳。故郷である高知県室戸市で、映画『放射線を浴びたX年後』を観たことがきっかけで、元漁師だった父の早すぎる死に疑問を抱き始める。当時「酒の飲みすぎで早死にした」と言われた父。本当にそうなのだろうか？高知県室戸市出身の漫画家、和氣一作さん（本名：大黒正仁。代表作「女帝」など）もまた、映画との出会いがきっかけとなって父の死に疑問を抱く。愛する父への強い思いが、二人を動かし始める。

一方、取材チームは放射線防護学の専門家と共に、1950年代当時、雨水の中に高い放射性物質が測定された沖縄、京都、山形を訪れ、独自に土壌調査をおこなう。民家の床板を外し、半世紀ぶりに現れた土。遠く離れた太平洋でおこなわれた核実験の影響は、今も日本列島に影響を及ぼしているのだろうか？

元漁師たちの証言、破られた船員手帳、厚労省への情報開示請求—。日本列島を揺るがした巨大被ばく事件から半世紀を経た今、決して消え去ることのない「被ばく」の傷跡が、徐々に明らかになる。

資料③ 『サイレント・フォールアウト』を見て考える



映画『放射線を浴びたX年後Ⅲ サイレント・フォールアウト 乳歯が語る大陸汚染』（英題: Silent Fallout）

ひさびさに「これは多くの人に紹介して、自主上映を呼びかけていきたい」と思う映画に出会いました。

それは、この映画が、放射線被曝被害の知識や情報を伝えるというだけでなく、核兵器の廃止や放射線被害を無くす活動をしている人たちを励まし、力づける映画でもあると思ったからです。さらに、今の状況を何とかしていかなければならないと思っている人にとっても、この映画を見て、感じたことをまわりの人々に知らせることから、それぞれの動きを始めることができる映画だからです。

【映画の解説】

1951年からアメリカ国内（ネバダ核実験場）で始まった核実験は、928回に及んだ。そのうち、100回が大気圏内核実験だった。大気中で行われた核実験によって生れた膨大な量の放射性物質は、風でアメリカ各地に運ばれ、雨や雪とともに落ち、地上を汚染し続けた。アメリカ原子力委員会は、調査の結果、ストロンチウム90が全米の牛乳を強く汚染していることを把握していたが、国民に知らされることはなかった。ところが、1950年代なかばから、大陸が放射能汚染していることを国民は徐々に知ることとなり、特に、放射能汚染の影響が強いとされるセントルイスで女性を中心とした大きな動きが生まれる。それが「乳歯調査」と呼ばれる活動だった。

子どもたちは、被曝しているのか？ カルシウムに似た性質をもつストロンチウム90は、骨や歯に留まる。そのため、抜けた乳歯を検査すれば、子どもが被曝しているかどうかを証明できる。最終的に集まった乳歯は、32万本。分析の結果、子どもたちの被曝が裏付けられた。はたして、乳歯調査の結果は？ 世界の未来を変えたのか？（「カクワカ広島」のホームページの映画解説 <https://kakuwakahiroshima.jimdofree.com/event-11182023/>より）

この映画の監督、伊東英朗さんは、2012年に『放射線を浴びたX年後』、そして2015年に『放射線を浴びたX年後Ⅱ』を制作しました。それらの映画で、1954年にビキニ環礁での水爆実験により被曝した漁船の乗組員のその後を追った映画を作り続けました。（『放射線を浴びたX年後Ⅱ』シネマDE憲法2015年12月14日掲載）

伊藤監督は、これらの作品をアメリカ国内で上映してまわった時に、アメリカの人たちが、核兵器の開発過程でアメリカ大陸全域が放射能汚染していることをまったく知らないことに驚いたと言います。そして核実験によるアメリカ人の被曝を追うこのドキュメンタリーの映画の制作を始めます。米国は核兵器を持つために行った核実験で、自分の国の人たちに甚大な被害を与えていること、核兵器を持つことがどれだけ大きなリスクと引き替えなのかを浮き彫りにするためです。

4000ページに及ぶ詳細な資料の分析と、30人の証言者への丹念な取材をもとに、映画は作られています。章立てがしっかりしているためでしょうか、構成がとてわかりやすく、伝えようとしていることが私たちの気持ちに入ってきます。そこには核実験によって被曝した人々の悲しみと怒りの強いメッセージだけでなく、見ている人の気持ちを引き込んでいく優しさのようなものを感じます。

それは、この映画が、子どもを被曝から守るために女性たちが始めた「乳歯調査」が話の中心になっているからかもしれません。映画の上映前に見せていただいた監督のビデオメッセージの中でも「女性と放射能」「女性の視点」という言葉がありました。

平和のための活動や運動を進める力を女性も持っていることを日頃から感じているのですが、監督の伊東さんも、「女性の行動がアメリカを救った。政治をチェスのように考える男性の論理ではなく、命に目を向ける女性の行動こそが変革を起こす」と話されています。

もうひとつこの映画を見ていて私が感じたのは、今の政治や国民の意識が、いかに「科学」を大切にしていないかということだ。

映画は、「乳歯調査」運動などの科学的解明こそが、人々を納得させる力をもち、核実験を無くす運動に広がっていったことをわからせてくれます。

しかしそうした真実を知りたいとする科学的な解明の運動にも、また政治は圧力を加えます。乳歯調査を運動にしていくなかで、この調査運動は「共産主義者を利するものだ」という圧力が加わったといえます。その裏には軍の戦争を行う上で都合な活動を抑え込もうとするものがあるのでしょう。

今、この国で進んでいる「自衛隊を軍隊と認め、戦争できる国にしようとする動き」にも同じようなものを感じます。軍をもつことを認めることによって、戦争に勝つための理由にして、ますます都合なことは隠し、知らせないことが進むような気がします。

日本の学術会議評議員推薦人事への介入や大学や研究機関での軍事利用科学研究の優遇政策にも、「科学」を都合よく戦争に利用しようとするものに通じるものがあることを思い起こさせます。

科学を大切にしている国とそうでない国、それはどれだけ、記録し、それを保存し、また開示するかということでも感じます。監督の伊東さんも「まず事実を知ること、そして核兵器を持つと言うことは自分や家族やみんなの命を、知らないうちに捧げているんだということを知った上で考えてほしい」と話しています。

監督の伊東英朗さんは、この映画をアメリカで上映してこそ意味があると、現在、アメリカで上映活動を進めていると聞きました。映画を制作するだけでなく、この映画をより多くの人に見せて、考えてもらうために努力していく、是非その「運動」を手伝っていただきたいと思います。

【制作スタッフ】

プロデューサー・監督・撮影：伊東英朗
ナレーション：日本語版 加藤登紀子
英語版 アレック・ポールドウィン

2023年制作／81分／日本映画／ドキュメンタリー

上映の問合せ：xyyears.info@gmail.com
予告編： <https://www.youtube.com/watch?v=dPJGVpJJ6iY>

（花崎）

資料④ 原爆・核実験・放射能汚染・内部被曝について考える映画・映像

広島長崎における原子爆弾の影響―長崎編― 1946年 84分 ドキュメンタリー 米国戦略爆撃調査団製作 日本映画社撮影
広島長崎における原子爆弾の影響―広島編― 1946年 81分 ドキュメンタリー 米国戦略爆撃調査団製作 日本映画社撮影
蜂の巣の子供たち 1948年 86分 清水宏監督 劇映画
長崎の鐘 1950年 劇映画
原爆の子 1952年 97分 劇映画 新藤兼人監督
ひろしま 1953年 104分 劇映画 関川秀雄監督
原爆の図 1953年 ドキュメンタリー 今井正+青山通春監督 丸木美術館
永遠なる平和を―原水爆の惨禍― 1954年 20分 ドキュメンタリー 日本映画新社
生きものの記録 1955年 113分 黒澤明監督
隠された被曝労働～日本の原発労働者～ 1995年 24分 テレビドキュメンタリー イギリス
無限の瞳 1955年 20分 ドキュメンタリー 成城高等学校生徒会
生きていてよかった 1956年
長崎の子 1956年 劇映画 木村荘十二
純愛物語 1957年 132分 今井正
世界は恐怖する―死の灰の正体 1957年 79分 亀井文夫
千羽鶴 1958年 67分 劇映画 木村荘十二
第五福竜丸 1959年 107分 劇映画 新藤兼人
二十四時間の情事 1959年 劇映画 アラン・レネ監督 ザジフィルム
その夜は忘れない 1962年 96分 劇映画 吉村公三郎監督
愛と死の記録 1966年 劇映画
千曲川絶唱 1967年 劇映画
原爆の図 1967年 ドキュメンタリー 宮島義勇監督 丸木美術館
ヒロシマの証人 1968年 110分 劇映画 斎村和彦監督
ヒロシマ・原爆の記録 1970年 ドキュメンタリー 松川八州男監督 日本映画新社
人間であるために 1974年 100分 劇映画 高木一臣監督
はだしのゲン (第一部) 1976年 107分 劇映画 山田典吾監督 北星映画社配給
ふたりのイーダ 1976年 99分 劇映画 松山善三監督 翼プロダクション
ピース・ゲーム 1977年 5分30秒 アニメーション イシュ・パテル監督 カナダ映画
ピカドン 1978年 10分 アニメーション
青葉学園物語 1981年 103分 劇映画 大澤豊監督
もし、この地球を愛するなら 1981年 26分 ドキュメンタリー テリー・ナッシュ監督
幻の全原爆フィルム日本人の手へ！ 悲劇の瞬間と37年目の対面 1982年 72分 熊谷博子監督
トビウオのぼつやはびょうきです 1982年 19分 アニメーション 板谷紀之
アトミック・カフェ 1982年 87分 ドキュメンタリー ケヴィン・ラファティ監督 ジェーン・ローダー監督 ピアーズ・ラファティ監督
にんげんをかえせ 1982年 20分 ドキュメンタリー 橋祐典監督/子供たちに世界に被ばくの記録を送る会映画製作委員会
予言 1982年 41分 ドキュメンタリー 羽仁進監督 平和博物館を創る会配給
ヒロシマ・ナガサキ 核戦争がもたらすもの 1982年 46分 ドキュメンタリー 早川正美監督 岩波映像販売
風が吹くとき 1982年 81分 アニメーション ジミー・ラカミイギリス映画
歴史=核狂乱の時代 1983年 116分 ドキュメンタリー 羽仁進監督 被ばくの記録を送る会
せんせい 1983年 103分 劇映画 大澤豊
この子を残して 1983年 劇映画
はだしのゲン 1983年 アニメーション 真崎守監督 茨城映画センター配給
おこりじぞう 1983年 アニメーション 板谷紀之監督 翼プロダクション
雨はやさしく 1984年 11分 アニメーション ナジム・トゥリャホジャーエフ監督 ソ連映画
白い町ヒロシマ 1985年 103分 ドキュメンタリー 山田典吾監督
24000年の箱船 1986年 33分 ドキュメンタリー 高橋一郎監督
千羽づる 1989年 96分 劇映画 神山征二郎監督
SOSこちら地球 1987年 62分 人形アニメーション 河野秋和監督
もうひとつのヒロシマ アリランの歌 1987年 58分 ドキュメンタリー 朴壽南監督

さくら隊散る 1988年 110分 劇映画+ドキュメンタリー 新藤兼人監督
夏服の少女たち ヒロシマ・昭和20年8月6日 1988年 30分 アニメーション
HELLFIRE:劫火―ヒロシマからの旅― 1988年 58分 ドキュメンタリー ジャン・ユンカーマン
TOMORROW 明日 1988年 105分 劇映画 黒木和雄監督 アスミックエース
黒い雨 1989年 13分 劇映画 今村昌平監督
ながさきのこうま 1989年 27分 アニメーション 河野昭和
ヒロシマ 母たちの祈り 1990年 30分 ドキュメンタリー 小笠原基生
八月の狂詩曲 (ラブソデー) 1991年 劇映画 黒澤明監督
ヒロシマが消えた日～人類最大のあやまち・原爆～ 1994年 77分 ドキュメンタリー ドキュメンタリー工房製作
引き裂かれた長崎～人類最大のあやまち・原爆～ 1994年 75分 ドキュメンタリー ドキュメンタリー工房製作
原発導入のシナリオ～冷戦下の対日原子力政策～ 1994年 44分 テレビドキュメンタリー 東野真
あの日 この校舎で―五十年前に被爆したナガサキの記憶― 1996年 30分 ドキュメンタリー 吉川透監督
はとよ ひろしまの空を 1999年 21分 アニメーション 矢吹公郎
核のない21世紀を ヒロシマからのメッセージ 2000年 60分 ドキュメンタリー 片桐直樹
H story 2001年 諏訪敦彦監督 東京テアトル配給
太陽をなくした日 2002年 17分
父と暮らせば 2004年 黒木和雄監督 パル企画
The Last Atomic Bomb (最後の原爆) 2005年 92分 ドキュメンタリー ロバート・リクター
解き放たれた魔法のランプのジニー 2005年 16分 ドキュメンタリー スティーヴン・ソーター、トレス・ゲイナー監督 アメリカ映画
夕凧の街 桜の国 2007年 118分 劇映画 佐々部清
ヒロシマ ナガサキ 2007年 86分 ドキュメンタリー スティーブン・オカザキ監督
フラッシュ・オブ・ホープ 世界を航海するヒバクシャたち 61分 2009年 エリカ・バニャレロ監督
ヒロシマ・ビョンヤン 捨てられた被爆者 2009年 90分 ドキュメンタリー 伊藤孝司監督
アトミック・マム 2010年 87分 ドキュメンタリー M・T・シルビア監督
二重被曝 語り部・山口の遺言 2011年 68分 ドキュメンタリー 稲塚秀孝監督
棄てられたヒバク～証言・被災漁船の50年目の真実～ 2011年 57分 テレビドキュメンタリー 伊東英朗ディレクター シングロ、ザジフィルムズ
ニュークリア・サベージ 2011年 87分 ドキュメンタリー アダム・ジョナス・ホロヴィッツ
はだしのゲンが見たヒロシマ 2011年 77分 ドキュメンタリー 石田優子監督
放射線を浴びたX年後 2012年 83分 伊東英朗監督
未来へのメッセージ 神奈川のヒバクシャが伝えたいこと 2012年 21分 近藤正典監督
ブラジルに生きるヒバクシャ 2012年 78分 ドキュメンタリー ロベルト・フェルナンデス監督
アオギリに託して 2013年 120分 劇映画 中村柊斗監督
原爆症認定集団訴訟の記録 おりづる 2013年 ドキュメンタリー 有原誠治監督
放射線を浴びたX年後II 2015年 86分 伊東英朗監督
一歩でも二歩でも 2015年 54分 ドキュメンタリー 有原誠治監督
ヒロシマそしてフクシマ 2015年 80分 ドキュメンタリー
この世界の片隅に 2016年 126分 アニメーション
いしぶみ 2016年 85分 ドキュメンタリー
広島原爆 魂の撮影メモ～映画カメラマン 鈴木喜代治の記した広島 2016年 29分 ドキュメンタリー 能勢広監督
いのちの岐路に立つ 核を抱きしめた日本 2017年 110分 原村政樹監督
西から昇った太陽 2018年 75分 ドキュメンタリー・アニメーション キース・レイミル監督
サイレント・フォールアウト 乳歯検査が語る大陸汚染 2023年 81分 伊東英朗監督

※「被爆者の声をうけつづ映画祭」ホームページの記載をもとに、追補し年代順に並べました。監督名など情報の十分でないところを調べ、引き続き追記していきたいと思っております。

資料⑨ 核実験・核爆発年表（1）

年		計画名	爆発回数	総出力	場所	備考
1945	アメリカ	トリニティ実験 (Trinity)	1	20 kt	ニューメキシコ州	世界初の核実験。
1945	アメリカ	リトルボーイ (Little Boy)	1	15 kt	広島市、日本	世界初の実戦使用。広島市への原子爆弾投下を参照。
1945	アメリカ	ファットマン (Fat Man)	1	21 kt	長崎市、日本	20世紀最後の実戦使用。長崎市への原子爆弾投下を参照。
1946	アメリカ	クロスロード作戦 (Crossroads)	2	46 kt	太平洋核実験場 (マーシャル諸島)	大戦後初の実験。初の水中爆発含む。
1948	アメリカ	サンドストーン作戦 (Sandstone)	3	104 kt	太平洋核実験場	
1949	ソ連	RDS-1			セミパラチンスク核実験場	ソ連初の核実験
1951	アメリカ	レンジャー作戦 (Ranger)	5	40 kt	ネバダ核実験場	
1951	アメリカ	グリーンハウス作戦 (Greenhouse)	4	398.5 kt	太平洋核実験場	熱核反応に関する実験含む。
1951	アメリカ	バスター・ジャングル作戦 (Buster - Jangle)	7	71.9 kt	ネバダ核実験場	兵員暴露実験含む。
1952	アメリカ	タンブラー・スナッパー作戦 (Tumbler - Snapper)	7	104 kt	ネバダ核実験場	
1952	アメリカ	アイビー作戦 (Ivy)	2	10.9 Mt	太平洋核実験場	初の水爆実験含む。
1952	イギリス	ハリケーン作戦 (Hurricane)	1	>25kt	モンテペロ諸島 (オーストラリア)	
1953	アメリカ	アップショット・ノットホール作戦 (Upshot - Knothole)	11	252.4 kt	ネバダ核実験場	M65 280mmカノン砲の実射試験。
1953	ソ連	RDS-6			セミパラチンスク核実験場	ソ連初の水爆実験とされたが、後には強化原爆の試験と考えられている。
1953	イギリス	トータム作戦 (Totem)	2	16.2kt	エミュー平原 (オーストラリア)	
1954	アメリカ	キャッセル作戦 (Castle)	6	48.2 Mt	太平洋核実験場	放射性降下物が規制エリア外に降下し、第五福竜丸事件が発生する。
1955	アメリカ	ティーポット作戦 (Teapot)	14	167.8 kt	ネバダ核実験場	初のローレンス・リバモア国立研究所の設計装置による実験成功。
1955	アメリカ	ウィグワム作戦 (Wigwam)	1	30 kt	東太平洋	水中核爆発。
1955	アメリカ	第56計画 (Project 56)	4	.01 to .1 kt	ネバダ核実験場	
1955	ソ連	RDS-37			セミパラチンスク核実験場	ソ連で行われた最初の水爆実験
1956	アメリカ	レッドウィング作戦 (Redwing)	17	20.82 Mt	太平洋核実験場	多段階核反応を含む熱核兵器の実験。
1956	イギリス	モザイク作戦 (Mosaic)	2	75kt	バロー島 (オーストラリア)	
1956	イギリス	バッファロー作戦 (Buffalo)	4	41.5kt	マラリンガ	
1957	アメリカ	プラムボブ作戦 (Plumbbob)	29	343.74 kt	ネバダ核実験場	
1957	イギリス	アントラー作戦 (Antler)	3	33.53kt	マラリンガ	
1957 - 58	アメリカ	第57、58、58A計画 (Project 57, 58, 58A)	5	0.5 kt	ネバダ核実験場	
1957 - 58	イギリス	グラッブル作戦 (Grapple)	9	7,869kt	クリスマス島、マルデン島	水爆実験
1958	アメリカ	チャリオット作戦 (Chariot)	キャンセル		アラスカ州	平和的核爆発としての一環。
1958	アメリカ	ハードタックI作戦 (Hardtack I)	35	35.6 Mt	太平洋核実験場	
1958	アメリカ	アーガス作戦 (Argus)	3	5.1 kt	南大西洋	高層大気圏における核爆発。
1958	アメリカ	ハードタックII作戦 (Hardtack II)	37	45.8 kt	ネバダ核実験場	
1958	アメリカ	A119計画 (Project A119)	キャンセル		月面	月面における核実験計画。
1959 - 63	イギリス	ヴィクセン作戦 (Vixen)	43	0kt	マラリンガ	核爆弾の装置の安全性実験。
1960	フランス	ジェルボアーズ・ブルー計画 (Gerboise Bleue)	3月4日		アルジェリア	フランス初の核実験。アルジェリア戦争下の示威。
1961	ソ連	ツァーリ・ボンバ		50Mt	ノヴァヤゼムリヤ	世界最大の核実験。
1961	フランス	アギヤット計画 (Agathe)	>12		アルジェリア	
1961 - 62	アメリカ	ヌガ作戦 (Nougat)	32		ネバダ核実験場、ニューメキシコ州	初の地下核実験。
1961 - 62	イギリス	NTSシリーズ (NTS series)	24	1,232kt	ネバダ核実験場	
1962 - 63	アメリカ	ドミニク作戦 (Dominic)	36	38.1 Mt	クリスマス島、ジョンston島、中部太平洋	タイトロープ (Tightrope) はアメリカが実施した最後の大気圏内核実験。
1962 - 63	アメリカ	ストラックス作戦 (Storax)	48	1442.8kt[1]	ネバダ核実験場	
1962	アメリカ	サンビーム作戦 (Sunbeam)	4	2.19 kt	ネバダ核実験場	戦術核兵器の試験。ネヴァダ核実験場で行われた最後の大気圏内核実験。
1963	アメリカ	ローラー・コースター作戦 (Roller Coaster)	4	0	ネリス試験訓練場	フルトニウム飛散に関する実験。

Wikipedia「核実験の一覧」より引用

資料⑥ 核実験・核爆発年表（2）

年		計画名	爆発回数	総出力	場所	備考
1964	中国				ロブノール（新疆ウイグル自治区）	中国最初の核実験
1964 - 65	アメリカ	ニブリック作戦 (Niblick)	41		ネバダ核実験場	
1964 - 65	アメリカ	ウェットストーン作戦 (Whetstone)	48		ネバダ核実験場、ミシシッピ州	
1965	ソ連	チャガン核実験				国家経済のための核爆発（平和的核爆発）の一環。。巨大クレーター生成。
1965 - 66	アメリカ	フリントロック作戦 (Flintlock)	48		ネバダ核実験場、アムチトカ島	
1966 -	フランス	アルデバラン計画 (Aldébaran)	>45		フランス領ポリネシア	水爆実験を含む
1966 - 67	アメリカ	ラッチキー作戦 (Latchkey)	38		ネバダ核実験場、ミシシッピ州	
1967	中国				ロブノール（新疆ウイグル自治区）	水爆実験
1967 - 68	アメリカ	クロスタイ作戦 (Crosstie)	48		ネバダ核実験場、ニューメキシコ州	
1968 - 69	アメリカ	パウライン作戦 (Bowline)	48		ネバダ核実験場	
1969	アメリカ	マンドレル作戦 ((Mandrel)	53		ネバダ核実験場、コロラド州、アムチトカ島	
1970	アメリカ	エメリー作戦 (Emery)	16		ネバダ核実験場	
1971 - 72	アメリカ	グロメット作戦 (Grommet)	34		ネバダ核実験場、アムチトカ島	米国最大の地下核実験“カニキン (Cannikin) ”[2]
1972 - 73	アメリカ	トグル作戦 (Toggle)	28		ネバダ核実験場、コロラド州	
1973 - 74	アメリカ	アーバー作戦 (Arbor)	19		ネバダ核実験場	
1974	インド		1		ポカラン試験場（ラージャスターン州）	
1974 - 75	アメリカ	ベッドロック作戦 (Bedrock)	27		ネバダ核実験場	
1975 -	フランス	アシーラ計画 (Achille)	>146		フランス領ポリネシア	
1975 - 76	アメリカ	アンヴィル作戦 (Anvil)	21		ネバダ核実験場	
1976 - 77	アメリカ	フルクラム作戦（英語版） (Fulcrum)	21		ネバダ核実験場	
1977 - 78	アメリカ	クレセット作戦（英語版） (Cresset)	23		ネバダ核実験場	
1978 - 79	アメリカ	クイックシルバー作戦（英語版） (Quicksilver)	18		ネバダ核実験場	
1979	南アフリカ イスラエル				インド洋	
1979 - 80	アメリカ	ティンダーボックス作戦（英語版） (Tinderbox)	15		ネバダ核実験場	
1980	中国				ロブノール（新疆ウイグル自治区）	最後の大気圏内核実験
1980 - 81	アメリカ	ガーディアン作戦 (Guardian)	16		ネバダ核実験場	
1981 - 82	アメリカ	プラエトリアン作戦 (Praetorian)	22		ネバダ核実験場	
1982 - 83	アメリカ	ファランクス作戦 (Phalanx)	19		ネバダ核実験場	
1983 - 84	アメリカ	フューズリア作戦 (Fusileer)	17		ネバダ核実験場	
1984 - 85	アメリカ	グレナディア作戦 (Grenadier)	17		ネバダ核実験場	
1985 - 86	アメリカ	チャリオット作戦 (Charioteer)	18		ネバダ核実験場	1986年4月10日に行われた“マイティ・オーク(Mighty Oak) ”実験では、封じ込めの失敗で放射能漏れが発生[3]
1986 - 87	アメリカ	マスケット作戦 (Musketeer)	15		ネバダ核実験場	
1987 - 88	アメリカ	タッチストーン作戦 (Touchstone)	14		ネバダ核実験場	
1988 - 89	アメリカ	コーナーストーン作戦 (Cornerstone)	12		ネバダ核実験場	
1989 - 90	アメリカ	アクアダクト作戦 (Aqueduct)	11		ネバダ核実験場	
1990 - 91	アメリカ	スカルピン作戦 (Sculpin)	8		ネバダ核実験場	
1991 - 92	アメリカ	ジュリン作戦 (Julin)	8	<460kt	ネバダ核実験場	米国による最後の核実験“ディバイダー (Divider) ”が、1992年9月23日に実施された。
1992 - 2014	アメリカ	新型核実験			サンディア国立研究所	93年以降爆発をとまなう実験は行われていない[4]
1996	フランス	クストー計画 (Xouthos)			ファンガタウファ環礁(フランス領ポリネシア)	フランス最後の核実験(地下核実験)。
1996	中国				ロブノール（新疆ウイグル自治区）	最後の地下核実験
1998	インド		5		ポカラン試験場（ラージャスターン州）	
1998	パキスタン・北朝鮮		6		プルトニウムによる原子爆弾	
2006	北朝鮮		1	0.8~2kt		
2009	北朝鮮		1	4~12kt		
2013	北朝鮮		1	7~40kt		
2016	北朝鮮		1			最初の水爆実験
2017	北朝鮮		1			

Wikipedia「核実験の一覧」より引用



第73回「憲法を考える映画の会」は、2023年12月23日、文京区民センターで行い、参加者128人でした。当日は、1950年代の砂川基地闘争を描いた『流血の記録 砂川』（56分）と参考映像としてTVドキュメンタリーの番組を見手、その後、トークシェアの中で砂川事件国家賠償裁判原告坂田和子さんにお話をいただきました。今回は、その坂田さんのお話と、参加者の皆さんからいただいた参加票の感想を転載させていただきます。

砂川事件国家賠償裁判原告 坂田和子さんのお話

こんにちは、坂田です。よろしくお願ひします。砂川闘争とは何だったのか、砂川事件とは何だったのか、そしてさらに伊達判決、最高裁、それから後のことも詳しく、…今私がここに来てお話をさせていただいている理由はですね、あの闘争に参加した者の中の人たちは、当たり前ですけどみんな一人一人、人生の物語があって、家族の話があって、今、映画で事件を見ていただきましたけど、その中にいた者の一人の子供ですけどね、私は、その中の一人として、父はどんな闘いをしてきたのか、また家族がどんな目にあったのか、ちょっとそのお話をさせていただきたいと思ひます。

最初に言ひます。坂田茂という砂川事件の逮捕・起訴された7人の中の1人の娘です。私は今66歳です。と、わざわざ言ってるのは、二つ意味があつて一つは、私は裁判で、原告尋問があつたんですけど、その時に年齢を書くという紙があつてですね、普段は60代後半という風にぼんやりと生きてきて、すごくびっくりしたんですけど、自分でも、歳がわからなかつたんですよ。緊張すればするほどわからなくなつてその時に良〜く考えて66だと判明しました。今日まで66です。明日で67になります。

もう一つはですね。生まれたのは1956年です。と言うことは、先ほど見ていただいたあの『流血の砂川』、あれが56年なんですよ。その時は私は12月生まれですから、そして私はまだ生まれていません。そしてその翌年、57年が砂川事件の年でした。その時はまあ乳飲み子だったんですよ。だから事件のことは…、この間「週刊金曜日」の方から取材を受けて、その前にもですね、尋問の時にも話したんですけど「事件の記憶はありますか？」って聞かれたんですけど、あるわけないですよ。

ただ、砂川闘争に参加したこと、それから伊達判決を受けたこと、そしてその後のことも含めてですね、一連のことは父にとっては大変誇りだったんですよ。最後に最高裁で敗れはしましたが、伊達判決、砂川事件、高校の教科書が出てきますよね。で、それを話す就非常嬉しそうに、それは「私がやった」、「お父さんがやった」ととてもうれしそうに誇りを持って語っていました。

例えば 砂川に行く時にですね。川崎市民なんですけど、父は日本鋼管の社員で、組合の活動家だったんですけど、南武線で行くんですね、川崎から、立川まで。その南武線の中で、これから砂川に行くと話して、カンパを募ると多くの方が応えてくれた。そんな闘争だったんだよって話してくれました。

そんな父は残念ながら2013年83歳で亡くなりました。

本当にあのびっくりするような、あの全体的にいつも慌てている、急いでいる人だったんでね。最後そんな感じで突然の死でした。それ以前にですね、2008年に映像の中にもありましたけれども、アメリカの公文書館からいろんな文書が見つかりました。で、父や土屋さんは「日本の機関の中でも文章が残ってるんじゃないか」ということであちこちに情報開示の請求をしたんですよ。そのさなかでした。13年に亡くなっている。

再審請求は2014年ですから、今のNHKの中では最後、触れられませんでしたけど最高裁に棄却されます。その後、国家賠償請求をやってるんですけどその国賠訴訟にも父は参加できなかったんですよ。あんなに運動に参加してきたことを誇りに思っていて、そしてこの文書公開されてこんなことは許されるわけがないと怒っていたのに、再審請求にも、国賠請求にも参加できなかったんですよ。

それで私は、父が亡くなった後ですね、亡くなる前は実を言うとおんまり仲の良い親子じゃなかったんですよ。それでももちろん関心はもっていましたし、いろいろ知っていましたけれども、ま「父は父でがんばってくれたまえ」と思っていました。私は教員の仕事をしてましたんで、教員の世界は大変なんです。皆さんおわかりになると思うんですけど、教育の世界でたくさんやることがある、「私はこっちでやる、あなたはそっちでがんばってください」と、そう言い交わすこともなく、勝手にそう思っていたんですよ。

でも亡くなった後にこれはやらなきゃいけないなと思ひました。実は2〜3日前に『ヤジと民主主義』っていうドキュメンタリー映画を見てきたんですよ。安倍首相の演説にヤジを飛ばした人が拘束される、その後裁判になったという映画なんですよけれども、その若い人がですね、「ヤジを飛ばしたら自分だから、そしてこんなことが、こんな風に拘束されてね 制限されることがあつてはならない」と、「これを訴えるのは自分しかいないんだ、自分がやるしかないんだ」と言っているのを聞いてすごく共感しました。で、父ができなかったことを代わりにできるのは私しかないと考えて、長年の仲の悪さを忘れてですね、私がやらなくちゃいけないと言うふうに思ひました。

父は、ちょっとすみません。ほんとにごく私的なことなんですけど、父は昭和4年の生まれです。4年の生まれと言うことは、終戦の時に16歳ですね。少年、幼少年期は、本人曰くですよ、本人曰く、活発で、利発で、運動神経もすぐれ、そしてリーダー性があり、みんなに慕われていた少年だと本人曰くです。私がうってるんじゃないですよ。本人はそう言っていました。で、当時ですね、土屋さんもそうだったと思う、そうなんですけど、そういう少年達、活発で前向きで積極的にやっていたりする少年達は、もれなく軍国少年だったんですよ。父もその通りでした。

で、その優秀な少年はですね、神奈川一中っていう学校に進学します。これはですね、これも大きな要因なんですけど、一中の中でも全国の三羽カラスつていわれる位、優秀な学校だったと本人は言ってるんですけど、わかりません。

で、そこまで本当に前途洋々じゃないかと思ひますけど、戦時中のことです。まだ戦争が激しくなる前のことですね、中学に入ったのは、12歳ですからね。おまけに彼はその頃に彼は父親を亡くします。まだ40代でした。

そうするとその後、母と、父は4人兄弟の長子でしたので、弟妹妹たちを抱えて、大変な苦勞することになるんです。せつかく入つた、彼に言わせれば優秀な中学校を一年でやめざるを得ず、そして横浜に住んでたんですけど、リヤカーひとつで、母が押し、父が引いて、弟たちを連れて羽田までに逃げたそうです。だんだんね、空襲が増えてきたもので、で、そのリヤカーひとつで引っ越しをした翌日に、横浜大空襲があつたそうです。

資料⑥ 第73回映画の会『流血の記録 砂川』(2023/12/23) 坂田和子さんのお話(2)

南区に住んでいたのも、もしそこに住んでいたら危なかったんじゃないかと思えます。

そしてその年、16歳で終戦を迎えるんですが、終戦を迎えてからの数年間というもの、数年間の中での苦労というものも大変なものだったと思います。小さい工場で働いたりだとか、これは割りと最近になって聞いたんですけど、そういえば、母が言うにはね「そういえば父さん若い頃、その頃ね、終戦後、馬を引いて荷物を売ってた」と言っていた。「何ですかそれ、馬？」って思ったんですけど、ま、とにかく大変な苦労をしたんだと、ま、自分でも何度も言っていましたけれどもね。でもこれは誰でも苦労したんだから(母は何度も聞いているの、嫌だったと思うんですけど)みんな苦労したんだからうちだけじゃないんだって。でも今思うとやはり大変な苦労だったんだなと思えます。

そして20歳の時に日本鋼管に入社するんです。当時はですね、日本鋼管に入社するっていうのは大変なことだったんだと思います。父にとっても、父にとっては嬉しいことであり、母や妹弟たちにとっても誇りであり、苦労ばかりだった生活から少しは安定した生活になるだろうと。でも父はその後、すぐ組合活動を始めます。

そして27歳の時に砂川事件です。彼はその年にはもう組合の執行委員でしたので、砂川現地に行って、あの柵が倒れて、敷地内に入ったということになってますが、何百人っていたんですよ。その中で逮捕されたのは23人です。起訴されたのが7人。これは後から父に聞いた話なんですけど、「どうもあの時、柵が簡単に倒れた」と、これよく聞いてみたら、土屋さんが前の晩に弛めておいたって言うことでね、要するに学生達がそういう風にしてた、土屋さん、映像の中で言っていましたけど、これはもう入って当然なんだと。当然だと思ったから弛めといたんだそうです。でも労働組合の人たちは知らなかったんですよ。で、入りました。27歳ですね。その後ですね、新聞報道とか、その後のいろいろテレビのニュースなんかでもそうなんですけど、「坂田茂ほか6名、起訴された者が」って出ることが多いです。なぜかという27歳最年長だったんです。今から思うとほんとに若い人たちの闘いだったんだなって思えます。27歳ですよ、それが最年長です。

私も人のお祝い、そろそろそういう歳になるんですけど、考えられないですよ。今ああいう闘いの先頭に立って、闘うなんてことはね。当時、きっと中心になって記者会見で話をしたりしていたりしたけど、きっとものすごく恐れもあったことだと思います。怖い思いもあったことだと思います。おまけに家族がいたんです。パートナー、妻がいて、私がいまして。生まれたばかりの。それですね、最高裁で、罰金2000円と言うことで、裁判は終わったんですけど、だから土屋さんは映像の中で、ここで全部終わってなと思ったとか言っていましたね。

でも実は、私達家族にとっては砂川は終えてなかったんです。実は、逮捕・起訴されたと同時にその時職場であった日本鋼管を解雇になってます。その解雇を撤回するための裁判闘争というのが終わったのが、最後解雇を撤回させるんですけど、私が高校2年の終わり3月です。つまり生まれたときからずっと裁判です。それはとても気持ちが不安になるものです。裁判ですから、勝つか、負けるかわかんないですし、だいたい幼い頃何をやっているのかもわからないんですよ。父は、鉄鋼労働者のはずだったんですけど、日本鋼管に行かない、何か平和活動とか、選挙の事務局長とか、そのような報酬の出ない活動をしていたわけです。で、組合のね、執行委員としてその運動に参加していたので、組合からの支援はあったんですけども、鉄鋼労働はちょっと揺れ動く時期があります。そのお金をね支払うということと、支払いを止めようとした時期があったんですよ。それも後から聞いたことなんですけど、そう考えると本当に不安定で不安のつきまとう頃だったと思います。どの位大変な思いをしたかと言うことを、この間ちょっと取材で聞かれて、でも覚えてないんです。本人としてはですね。でも同地住まいで、当時みんな貧しかった

ので、ま、そんなに自分だけ貧しいとは思ってなかったんですけど、そうやって何度か聞かれるうちにですね、思い出してみると確かに大変だったなって、例えば新しい自転車、サイクリング車みたいなのが流行って、周りの子供たちがみんなね買ってもらったサイクリング車に乗っている中で、うちの弟だけは新しいものを買ってもらえず、古い自転車にペンキを塗ってですね、「新しくなったぞ」って、父親に騙されてですね、友達には「南武線」と言われる、みんなわかりますか、ボロ電車という意味ですけどね、南武線と言われてね、そんな自転車に乗ってたんです。可哀想なことしたなと思えます。

で私自身も実はよく考えてみたら、中学を卒業する春休みからアルバイト生活です。いけないと思うんですけどね。ずっと後、教育者やってたんで、あんまり言えないんですけど。中学3年の春休みから高校生活のずーっとアルバイトで、あたりまえだと思ってたんです。欲しいものは自分で稼いで買うって言うのがですね。で、その中においても弟がですね、ネフローゼという難病に指定されてます病気になるって入院したり、祖母がつまり父の母が癌で入院したりとか、そういうことが重なってですね、ものすごく大変だったんだと思います。でもあんまり子どもにそういう思いをさせなかったって言うところがすごいかなと思うんですけどね。

そして高校3年で、高校2年の終わりにそれ(解雇撤回の裁判)が終わり、それでようやく全部、砂川関係が終わったなと思ったところへですね、2008年、さっきのNHKの映像の中でありましたけど、毎日新聞でした最初。アメリカの公文書館で文書が見つかったと。びっくりしましたよ。土屋さんもそう言っていましたけれど。父もびっくりして、「これはおかしい」と。父や私にしてみれば、あの最高裁で終わってないんですよ。それから十何年間もずーっと続いて、私達を不安に陥れていた砂川関連(裁判)がですね、一方の当事者と裁判長が相談をしていたとか、何かを決めようとしていたとか、あるいは跳躍上告をすることをアメリカから言われてやっていたとか、何ですか藤山愛一郎さん、そんなことありですか。

私は長い間36年間にわたって、小学校の教員をしてみました。6年生も何度か担任しています。6年生では「日本は3権分立の国だよ」って教えるんです。でもこんなことが明らかになったら、教えられませんよ。だから意見陳述をする時にですね、裁判長に、「これからね、社会が教えるものが胸を張ってこの国は三権分立の国だと言えるようにしてください」と言うことを裁判長にお願いしたんです。

それからですね。最後に公平な裁判所でやる裁判を受ける権利を、侵されているってことを言いましたよね。で、再審請求を棄却されたんですけども、国家賠償請求をやって、長い、もうこんなに長くやると思わなかったんですよ。私ずーっと闘っているというか、先輩の土屋さん、「土屋さんがんばって」、絶対に生きて言う、私のひとり芝居でと言う思いが、あと椎野さんもですね。椎野さんも、土屋さんがんばって生きてほしいという気持ちがすごく強くて、そんなこと言っていると私が先に逝っちゃうかもしれないんですけどね。とにかく、この国賠請求、なんとか闘い抜きたいと思っていたら、口頭弁論続いて、まだやるの、まだやるの、かって実は内心思っているんです。

で、いよいよ先日、最後で、結審を迎えてですね、1月15日判決です。東京地裁103号大法廷で、午後2時から判決です。その後、記者会見も行きます。

どういう判決が出るかですね、もう垂れ幕を用意してます。とにかく判決の言い渡しは、あつという間ですよ。えっ、という間に終わりますよね。ですけども、そこに、大勢の方に参加していただく、これまでね、ずつとあの多くの方に傍聴に来ていただいていた。その判決の瞬間をですね、ずつと見守って言っていたいただいた皆さんと一緒に迎えたいなと思っていますので、どうぞ傍聴に来ていただきたいなと思っています。良い判決が出ることを心から期待していますし、どっちにしても最高裁に行きます。最高裁はできますので、これからも支援をよろしくお願いいたします。

資料⑦ 第73回映画の会『流血の記録 砂川』（2023/12/23）参加者感想から（1）

【参加票に寄せられた感想など】

●「平和と独立」を叫んでいた若い学生、労働者が地元の人といっしょに闘ったこの記録は、総評、全学連がまとめて連帯して運動をしていたことに感動をおぼえます!!
いまは分断、分裂、相互批判が主流です。日本の原点（戦后レジーム）に帰って考えてみたいです!!

見たい映画：キャンデーズのスーチャン田中好子主演の映画「黒い雨」!!(S.H)

●映画、NHK ETVの映像、坂田さんのお話 — すばらしい組み合わせでした!(A.F)

●参考映像 — NHK（私はハナから無視するクセがある）でこんな大事な放送をしていたとは。土屋源太郎さんを主体にしながらも、登場する学者、山内氏以外はチョットあやしい。やっぱりNHKだ。扱い方はともかく、この問題を取り上げるのはNHKらしくなかった。（少しホメテやりたい。）

アメリカの公文書をもっともっと取り扱えばと思うのだがそれはムリでしょう。(Y.I.)

●新ためて（ママ）国家権力の恐ろしさを知りました。“国”って何だろう、と、本当に必要なのかと。国のために多くの犯罪（越境とか在留とか）が生まれ、国のために、戦争が肯定され得もする。あの斗いの最前に若い女性や老人・子供がいても国家は警棒を振るうのだろうか、ずっと見ながら思っていました。土地を守ることが戦争反対の意志に通じる。これはこの度また新（ママ）ためて知ったことです。今回この映画を見、本当に自分のできることは何かを悩んでいくことを忘れずにいきます。

「知事抹殺の真実」「天から落ちてきた男」「ヤジと民主主義」など。「ニッポニア・ニッポン」「少女ファニーと運命の旅」再映を待っています。

※どの映画もみな何度でも見たいです。(K.Y.)

●アルジェの戦い
ドイツ、青ざめた母 (K.F.)

●すばらしい企画でした。ありがとうございます。
私は生まれが立川市富士見町2丁目で立川4小の真上を米軍機が良く飛んでいたのを覚えています。砂川闘争の頃はまだ生まれていませんでしたが、反基地闘争や、国家権力のひどさが良く分かりました。
自発的対米従属主義がまだまだ続いている事を思いました。辺野古に対しても同じように感じています。(Y.F.)

●砂川事件のことをTV映像も含め、貴重な映画を見せていただきました。(S.W.)

●初めて知りました。家に帰って資料をじっくり読み込み、人にも伝えたいです。(Y.H.)

●すごく参考になりました。当時の熱気、大勢の闘争参加者に、いい意味の衝撃を受けました。(Y.T.)

●砂川事件への学びを深めることができました。市民運動（非暴力!）の力強さを知りました。今日、参加して良かったです。ありがとうございました。(Y.O.)

●この映画会のおかげで憲法について、平和について深く考えるチャンス（時間）をいただいています。ありがとうございます。

P.S.ウクライナ、イスラエルの問題を考えていて、マンデラ氏（南ア）のやり方を深く知りたいと思っています。(K.K.)

●1987年、初めて行った米国で、アメリカ、インディアン運動の一人、デニス・バンクス氏が砂川闘争の時、基地の中から、日本の市民、学生、僧侶が警官達の暴力を受けながらも闘い続ける姿を見ていて、後のネイティブアメリカンの権利回復のため行ったウーンデッドニー（1890年、アメリカの騎兵隊によって約350人のインディアンが虐殺された事件。）やアリカトラズの闘いを進めるための原点になったと伺いました。僧侶の叩く太鼓の音をずっと覚えているとの話で、今に続く非暴力闘争の原点でもあるとの話でした。

日本は戦争へ至る道への反省をしてきたのか？責任を取るべき人間が責任を取ったとは各省庁の現在の姿を見ても一向一つとル記も姿勢もないことが明らかです。この無責任（行政責任への）の“伝統”はいつまで続けさせることになるのか、情けないが意ある若人が、健やかに数多く育つことを祈るのみです。

三里塚闘争の時の大木よねさん宅の時は、多勢無勢で、やられたが、砂川の栗原さん宅の時は多くの人々のスクラムで阻止した姿にやはり感動を止められません。全学連が分裂分解し、労組も連合という中に、全電労など原発を推進する者が大手を振って、蝕まれ働く人の人権の砦とはもはや遠い存在となってしまった。自分の人権を守る術を、子どもたちは教わっていない。団結だけが弱い人間の唯一の力であることをもっともっと自覚的に学ばないと。暴力を含む大きな力、権力に人生の決定権を国家に左右されてしまう。

坂田しげるさんの娘さんのお話し最高裁判決のあと、日本鋼管から解雇され17歳までの危うい暮らしの中で、闘っておられたことを知りました。こんな時代だからこそ声をあげ、殺されるわけでもない今、伝える場で、伝えてゆかねばと思います。

安倍の残したこの悪政を何としても変えないといけなく思います。きょうの機会を作っていただきありがとうございます。(K.T.)

●断片的に知っていて、もっと知りたいと思っていた砂川基地闘争のことを、裁判も含めて知ることができてよかったです。

・とくに女性たちの姿が印象的でした。沖縄の高江や辺野古の座り込みに参加経験があるため、それと結びつけてイメージできて涙が出ました。

・坂田さんのお話も家族の視点でリアルに語られて今に続いていることがよくわかった。

・自分としては、今も続いている沖縄の軍事基地化に反対する運動を続ける中で連帯していきたいです。(M.K.)

●いつもテーマが感心あるものを採り上げて下さりありがとうございます。日本の歴史、米との関係がよく理解できるものでした。近代、現代の隠されている事実、知る権利を奪っている今を、勇気が必要、意識を向上、持続性の大切さを思います。世の中を変えるための働き、少しでも行動したいと考えます。（先日、浦和駅前スタンディングやスピーチ、パレードを行いました。）(M.K.)

憲法映画祭2024

毎年、5月の憲法記念日を前に、憲法を考える映画の会では「憲法映画祭」を催してきましたが、来年の会場が決まりました。2019年から続いている武蔵野公会堂です。

と き：2024年4月29日（休・月）午前～夜
ところ：武蔵野公会堂ホール（吉祥寺駅南口2分）

憲法映画祭も、今回で8回目。今年は1日だけの開催です。岸田首相は 2024年1月30日の施政方針演説でも「改憲を今年9月中の自分の総裁任期中に実現したい」と主張しました。準備は着々と進められています。

そうした改憲の動きを見据え、改憲させない動きに役立つようなプログラムを作っていきたいと思っています。

今月中には上映作品、お話の演者などを決めていきたいと思っています。

ご意見や映画の紹介などお寄せ下さい。

また一緒に準備し、プログラムを作り、試写し、宣伝し、当日の運営にあたるスタッフを求めています。お声がけください。

憲法を考える映画のリスト 2024年版？



これは2021年版です

「憲法を考える映画のリスト 2024年版」を来年4月29日の「憲法映画祭2024」をめざして新しい作品を加え、編集しているところです。できるだけ多くの方が自主上映会をできるような手の届く作品を選んでいきます。新作、あるいは新作でなくても「これは『憲法を考える』よい映画だ」と思う作品がありましたら是非教えて下さい。

上映会・催し案内

[座・高円寺]ドキュメンタリーフェスティバル

日時：2月8日（木）～2月14日（月）
会場：座・高円寺2（高円寺駅）

2月8日『ヤジと民主主義 劇場拡大版』
2月9日『カメラを持った男たち— 関東大震災を撮る—』『私はあなたのニグロではない』『女たちの証言— 労働運動のなかの先駆的女性たち—』『メディアの敗北— 沖縄返還をめぐる密約と12日間の闘い—』
2月10日『ハマのドン』『シン・ちむどん』
『愛国者に気をつけろ! 鈴木邦男』『キエフ裁判』
2月11日『救いの手 統一教会と富山政界』『こどもが映画をつくるとき』『蟻の蠢き』
2月12日 Yahoo短編ドキュメンタリー選『何も知らない彼』『マリウポリ 7日間の記録』『ガザ 素顔の日常』

第13回死刑映画週間

と き：2024年2月10日（土）～2月16日（金）
ところ：渋谷・ユーロスペース

『ある男』（2022年/日本/121分）2月10日・11日・13日・15日
『私、オルガ・ヘプナロヴァー』（2016年/チェコ・ポーランド・スロバキア・フランス/105分）2月10日・12日・14日・16日
『キエフ裁判』（2022年/オランダ・ウクライナ/106分）2月10日・12日・13日・15日
『袴田巖 夢の間の世の中』（2016年/日本/119分）2月10日・12日・14日・15日
『対峙』（2021年/アメリカ/111分）2月11日・12日・14日・16日
『赦し』（2022年/日本/98分）2月11日・13日・14日・16日
『青春を返せ』（1963年/日本/94分）2月11日・13日・15日・16日

江古田映画祭

と き：2024年2月24日（土）～3月11日（月）
ところ：武蔵大学・ギャラリー古藤（江古田駅）

●2/24（土）『福田村事件』
●2/25（日）『飯館村べこやの母ちゃん』『廃墟と化した鉄の町 釜石艦砲射撃の記録』
●2/26（月）『不安の正体』『サイレントフォールアウト』『「生きる」大川小学校 津波裁判を闘った人たち』
●2/27（火）武蔵大学永田ゼミ4作品 『飯館村べこやの母ちゃん』
●2/29（木）『福田村事件』『福島の高校生が処理水問題を考える』
●3/2（土）『パレスチナからフクシマへ』『ガザ～オスロ合意から30年の歩み』●3/1（金）『東電テレビ会議 49時間の記録』『不安の正体』
●3/3（日）『「生きる」大川小学校 津波裁判を闘った人たち』『ナオト、いまもひとりっきり』
●3/6（水）『ナオト、いまもひとりっきり』『不安の正体』『[アニメ]ふながだの海』●3/7（木）『廃墟と化した鉄の町 釜石艦砲射撃の記録』『「生きる」大川小学校 津波裁判を闘った人たち』『サイレントフォールアウト』●3/8（金）『[アニメ]ふながだの海』『廃墟と化した鉄の町 釜石艦砲射撃の記録』[朗読劇]線量計が鳴る
●3/9（土）『サイレントフォールアウト』『[アニメ]ふながだの海』『ナオト、いまもひとりっきり』
●3/10（日）『福島の高校生が処理水問題を考える』[朗読劇]線量計が鳴る ●3/11（月）[朗読劇]線量計が鳴る

第7回 むのたけじ反戦塾

と き：2024年3月20日（水・休）
13時30分～16時30分（13時開場）
ところ：文京区民センター3C会議室

2022年12月から始めた学習会（むのたけじ反戦塾）も7回目になります。むのさんの著書「希望は絶望のど真ん中に」を1章ずつ読み、またむのさん自身がお話をされている映像を見ながら「戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ」するためにどうしたら良いか、ひとりひとりが思うことを出し合い、認識を深めて、行動の方法を考えます。2ヶ月に1度のペースで、少人数で話合います。

第7回になる次回は、むのさんの講演映像「今の憲法でなぜ悪い」を見ます。また前回参加された方の発言から「自衛隊を今、どのように捉えるか?」について、それぞれの考えを話し合って行きたいと思っています。

開催日の前に「手元資料」を作成します。手元資料には、「希望は絶望のど真ん中に」の討論資料に加え、その前の回の皆さんの発言記録を載せるようにしていますので当日参加されない方もどうぞお求めください。

* 問合せ先：090-4599-5314 武野
〒338-0006 さいたま市中央区八王子4-7-10-201
E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp